

1.1.9 チェックボーリングを省くことの弊害

テンドンを現地で組み立てる方式の場合、事前のチェックボーリングが省かれることがある。すなわち、掘削時のスライム等から地質状況を判断して、1本ずつ掘削深度（テンドン長）を決定するものであるが、第三者に対する判定資料がスライムのみではあまりにも説得力に欠けるように思われる。

ある程度の調査がなされ、およその着岩深度が想定できる場合であれば、こうした方法も可能と思われるが、施工縦断沿いにほとんど地質情報がない場合（例えば花崗岩地帯のように深層風化やタマネギ状風化を残すような地層）では、スライムや掘削時のトルクのみで定着地盤層の判断はできないように思われる。

安全側を考えれば、過大な工事に陥りやすく、また基本調査試験位置が当該現場を代表するか否か、あるいは設計上安全側となるか否かの判断もできず、施工サイドとしては極めて不安な工事となりやすい（図 1.9.1）。

したがって、基本的には施工縦断沿いに適度な密度でチェックボーリングを行ない、全体の地質状況を把握する必要がある。そのうえで、相対的に脆弱な区間で複数の基本調査試験を行い、定着長等の詳細設計を行うべきである（図 1.9.2）。

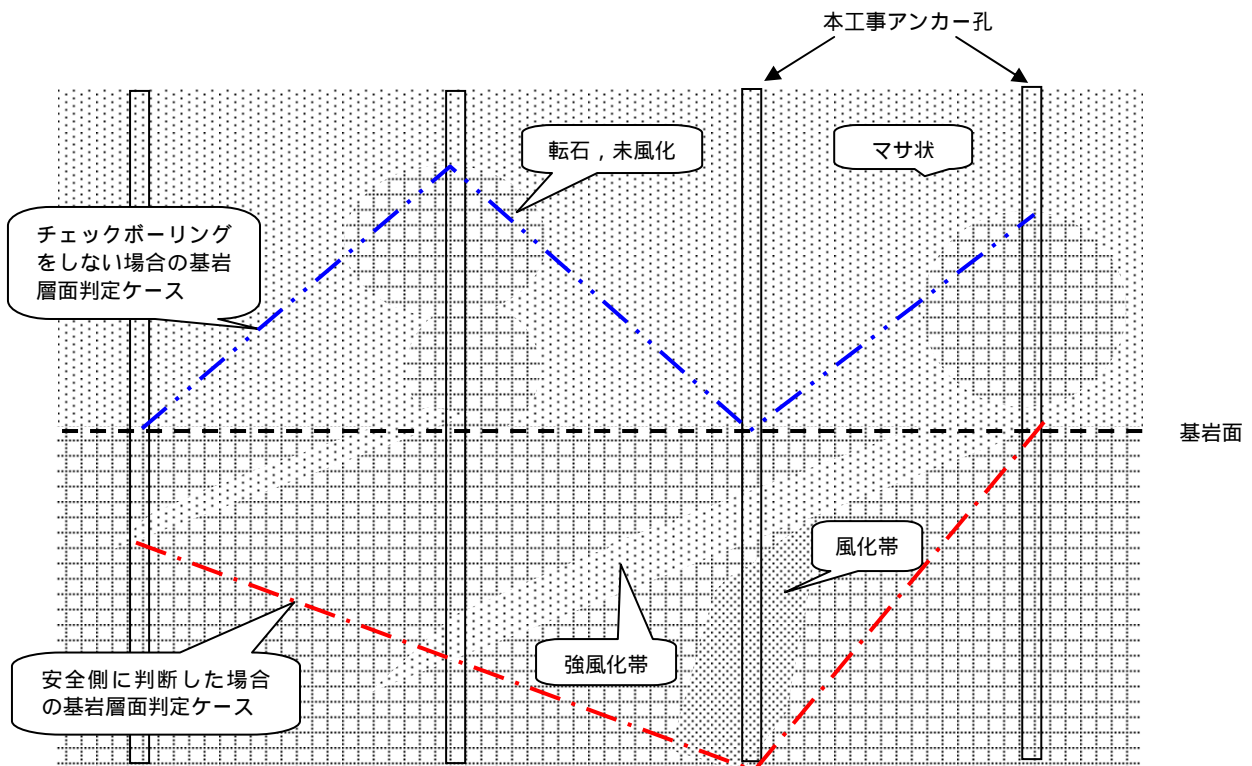


図 1.9.1 基岩層面を誤りやすいケース

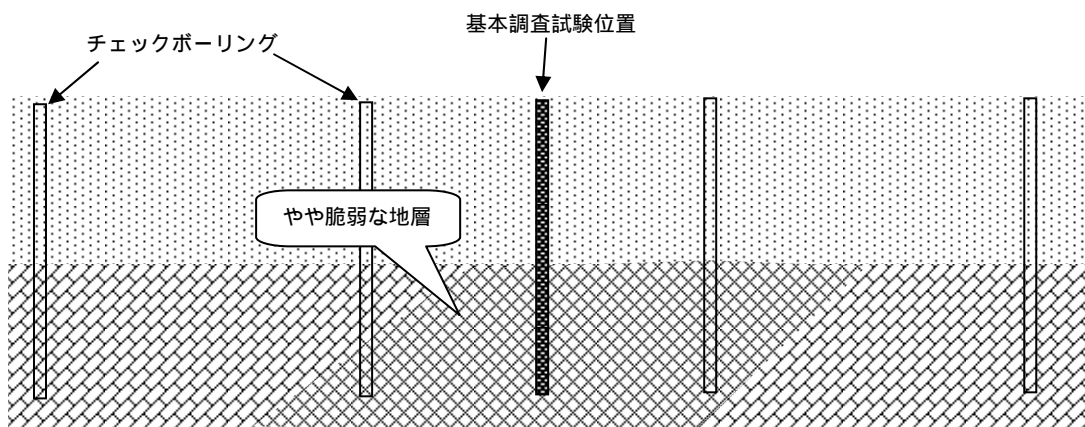


図 1.9.2 チェックボーリング結果による基本調査試験位置の選定